



King Kong

キングコング



King Kong

キングコング

カラー作品／パナビジョン
アメリカ映画

東宝東和提供



世界映画界最大の話題をあつめて、いよいよ世紀の巨編「キングコング」が登場する。身長20メートル、体重じつに65トン、製作費300万ドル(9億円)という、超大型ヒーローのキングコングをめぐる、史上空前、2,500万ドル(75億円)の巨費を投じて放つ77年最高の超迫力大作だ。パニック、巨大怪物、スペクタクル、ロマンと、あらゆる楽しさと魅力をつめこんだ映画史不滅の名作が43年ぶり、さらに雄大に、さら

この、世紀の巨編にとりくむのは、国際的大プロデューサー、ティーノ・テ・ラウレンティス。かつて「戦争と平和」「天地創造」の超大作を次々と手がけ、近くは「セルピコ」「コンドル」「ハップスティック」、さらにベルリン映画祭グランプリの「ビッグ・アメリカン」と、とりあげるテーマは多様、その精力的な活動範囲は際限がないようだ。

ルノ」で超高層ビル火災の恐怖をたつぷりとみせてくれた巨匠ジョン・ギラーミン。こんどは、巨大「ゴリラ」を相手にあざやかな才腕を披露する。そして、特撮技術に「ジョーズ」のスタッフ、音楽に2度のアカデミー賞に輝く「007」シリーズのジョン・バリ―と、超A級の顔ぶれが結集、この超大作にチエをしぼりぬいた。加えて、脚本に「バビヨン」「コンドル」のロレンソ・センプル・ジュニア、撮影に「マンティンゴ」のリチャード・クライン、美術は「ミクロの決死圏」でアカデミー賞受賞のテール・ヘネシー、特殊効果は「大地震」など2度のアカデミー賞に輝くグレン・ロビンソンがそれぞれ担当、万全のチーム編成が組まれた。

主演はキングコングにさらわれる美女に映画初出演のニューヨークの人気モデル、ジェシカ・ラング。コングの学術的意義を説いて容れられない新進気鋭の動物学者に「ラスト・ショー」のジェフ・ブリッジス、野心満々の石油会社の幹部にブロードウェイで活躍するチャールズ・グローティン。南海に浮かぶ幻の孤島で生け捕られたキングコングをめぐる、緊迫感をはらんだプロローグから、クライマックスのニューヨーク最高を誇る地上411メートルの世界貿易センター・ビル上でのコングの壮絶な闘いまで、痛快・華麗なスペクタクルがくりひろげられる。

撮影はハリウッドのMGM撮影所内の7つのスタジオをフルに使用して行なわれたほか、ハワイ・ロケを敢行。本年1月の製作開始と同時にこれほど騒がれた作品も類がなく、撮影中も激しい取材合戦が展開されたが、いまようやくその全貌を現わすのである。76年12月18日、ニューヨーク＝ロンドン＝東京の三大都市を結んで映画界空前、全世界2200都市2700劇場同時ロードショーが決定、わが国でも洋画では初めての全国109都市168劇場において超拡大一斉ロードショーのはこびとなった。



ドワン..... ジェシカ・ラング
 プレスコット..... ジェフ・ブリッジス
 ウイルソン..... チャールズ・グローティン
 ロス船長..... ジョン・ランドルフ
 バグリー..... ルネ・オーベルジョノワ

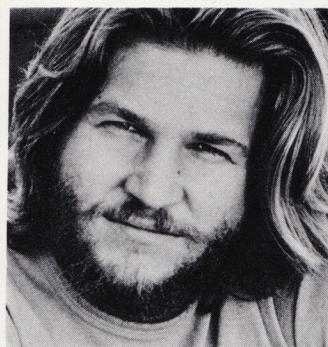
監 督		ジョン・ギラーミン
製 作		ティエノ・テ・ラウレンティス
脚 本		ロレンゾ・センプル・ジュニア
製作指揮		{ フェデリコ・テ・ラウレンティス クリスチャン・フェリー
撮 影		リチャード・クライン
音 楽		ジョン・バリ
美 術		{ マリオ・キアリ テール・ヘネシー
特殊効果		グレン・ロビンソン

ジェシカ・ラング

Jessica Lange

ディーノ・デ・ラウレンティスはよほどモデル嬢がお好きとみえて、こんどもヒロインに選ばれたのはニューヨークの売れっ子トップ・モデル。幸運なシンデレラはロサンゼルスに飛んで僅か2時間のスクリーン・テストで決定した。長い間女優を夢んでいたジェシカにとって、まさに願いがかなった思いだったに違いない。そして、ハリウッドはいままた70年代の美女をひとり生み出したのだ。

ミネソタ生まれ、州内各地を転々とし、ミネソタ大学に学んだのち、パントマイムの勉強のため、パリに行く。やがてニューヨークに戻り、ダンスのレッスンを受けたのち、モダン・ダンス・グループに加わった。現代的な魅力と抒情的な美しさが買われたのがモデルへの道につながり、それが女優への座に導くもとになったのである。好きな作家はスタンダール、作曲家はシューベルト。フランス語が得意。なお、両親は芸能界とは無縁。



ジェフ・ブリッジス

Jeff Bridges

「ラスト・ショー」と「サンダーボルト」で2度アカデミー賞にノミネートされた若手演技派の代表的スター。

1949年カリフォルニア州生まれ。父ロイド、母ドロシー・トンブソン、兄ボーはともに俳優という珍しい一家。8歳のとき父のテレビ・シリーズで芸能界にデビュー。その後も父のテレビ番組で演技経験を積んだ。ロサンゼルスでハイスクールを卒業後、ニューヨークに移り、ユタ・ヘイゲン芸能学校で本格的に演技を学び、作詞・作曲にも才能を示した。70年「怒りをこめてふり返れ！」で映画デビュー。69年に作った「ロスト・イン・スペース」は映画「ジョンとメリー」の中でも使用されるほどでミュージシャンとしても高く評価されている。

コングの発見に力を尽し、その保護を訴える新鋭教授役プレスコットについては、「彼は恐竜と闘う騎士だ。コングを利用する野心に燃えながらもやがて理解する方に傾く。」と語り、現代人の屈折した心理を表現した。



製作/ディーノ・デ・ラウレンティス

Dino De Laurentiis

監督/ジョン・ギラーミン

John Guillermin

今や、巨額の製作費を投じたスペクタクルをつくらせたら、右にでるものがないスーパー・ディレクター。ラウレンティスが77年空前の超大作「キングコング」の製作を発表するや、真っ先に監督に選ばれた。前作「タワーリング・インフェルノ」による並はずれたスペクタクルの才能を買われたからだ。

1925年11月11日にロンドンで生まれた。フランス人の両親の下、イギリスで生活。第二次大戦にはイギリス空軍に入隊。幼いころから映画の世界に憧れ、46年復員するや、フランスに渡り、映画の仕事に携わる。最初はドキュメンタリー映画や短編を演出する。49年にイギリスに戻り、脚本を書きながら本格的に監督としての第一歩を踏み出す。

「ターザン」シリーズなどB級作品ばかり演出していたので、わが国にはほとんど公開されず、まったくの無名に近かったが、海外ではその才能を高く評価されていた。

66年度大作「ブルー・マックス」の評判により、そのハギレよい演出手腕が認められ、「レマゲン鉄橋」(69)「エル・コンドル」(70)「ハイジャック」(72)と次々にハリウッド大作を手がけた。そして、当時空前のバニッ・スペクタクル超大作と言われた「タワーリング・インフェルノ」(74)の大成功により、押しも押されぬ大物監督となる。

娯楽に徹した、スピーディでコキミよい演出、観客をまったくアキさせない腕前は「キングコング」でも見事に発揮されている。

話題の大作、問題作を続々と発表し、常に世界の映画界に新風を送り込む名実ともに世界的プロデューサーの第一人者。

1919年、イタリアのナポリに生まれ、19歳の時に俳優として映画界入り。21歳で製作主任となり、22歳の若さで製作者として、トリノのレアル・チネを設立。以後、プロデューサーとしての活躍が始まった。

50年に、カルロ・ボンティとボンティ＝デ・ラウレンティス社を設立し「戦争と平和」(55)「カピリアの夜」(56)など、イタリア映画史に残る数々の名作を手がけたが、57年にコンビを解消、独自の道を歩む。殊に、ローマ郊外に広大な敷地を持つ撮影所ティノチッタを建設し、大作「天地創造」を製作したのはあまりにも有名である。

なお、49年に野性美女優として人気のあったシルバーナ・マンガーノと結婚。プロデューサー＝女優夫婦というイタリア映画界の通例のトップを切った。

73年に、事務所をニューヨークに移し、「マンティンゴ」「コンドル」「リップスティック」と精力的に話題作を発表。ついに、アメリカが誇る最高のヒーロー、「キングコング」の映画化に着手、彼のプロデューサーとしての全精力を傾けて映画史上空前の超大作を生み出したのである。尚、彼の愛息フェデリコも、この作品の共同製作者として名を連ねている。

(主な作品)「にがい米」(48)「ユリシース」(53)「河の女」(54)「戦争と平和」(55)「天地創造」(66)「異邦人」(69)「ワートルロー」(70)「暗殺者のメロディー」(72)「バラキ」(72)「シンジケート」(73)「マンティンゴ」(73)「コンドル」(75)「リップスティック」(76)「ビッグ・アメリカン」(76)「シューティスト」(76)「鏡の中の女」(76)「オルカ」(77)「ホワイト・ハッファロー」(77)







激しい石油ラッシュの波をあびて、ベトロックス社のウィルソンは南太平洋に新たな油田を求めて、調査船を進めていた。最終目的地はスカル島。いつも濃い霧に覆われ、その所在すら海図には明らかなでないが、ウィルソンはそこに膨大な埋蔵量の海底油田がある

ものがたり



ことをつきとめていた。だが、もう一人、まったく別な目的でスカル島をめざす男がいた。密航者として乗船していたプリンストン大学の若き動物学者プレスコットである。島全体に立ちこめる異常に濃い炭酸ガスは、ウィルソンのいう、石油の鉱床から湧き出したものでなく、動物の呼吸によるのではないかとの推測に立つ彼は巨大な類人猿の怪物が棲息しているという過去の記録を自分の目で確かめようというのだった。ウィルソンはこのヒッピー風の若者になぜか好感を持てなかった。

調査船はある日美しい漂流物を発見した。映画出演のため、香港へ向かう

航海の途上嵐にあい、ただ、一人奇跡的に助かった女優でダウンといった。

霧の海の中を通りぬけると、目の前にスカル島があった。上陸した調査隊が野を越え谷を渡ってとある部落にさしかかったとき、奇妙な合唱が響いてきた。「コング、コング…」島民の盛大な祭りの儀式の真最中のようなのだ。やがて一人の少女が巨大な城門の前に築かれた祭壇に連れてこられた。どうやら、何かのいけにえにされる運命に見える。だが、運悪く、ダウンが島民に発見され、新たないけにえにされる危険が迫ったので、一同は彼女を擁護していったん船に戻った。プレスコットは自分の仮説が立証されたと喜んだが、ウィルソンはあくまで石油至上主義で、そのための島民や生物の犠牲もやむなしと主張し、激しく対立した。

だが、その夜ダウンが行方不明になった。ダウンに執着する島民のしわざに違いなかった。プレスコットたちが気づいて島に向かうあいだに、すでにダウンは美しいいけにえとして、城門の彼方に連れ去られていた。手に手にタイマツをかざし、城壁の上に立ち並んで狂ったように叫びつづける島民たち。やがて、森の奥から、凄まじい地響きがして、何か巨大な生きものが近づいてくる。麻酔薬からさめたダウンの頭の上に、それはそびえ立っていた。島民たちが「コング」と呼びあがめているもの、身長20メートルはあるかと思われる巨大なゴリラ、いや怪物にほかならなかった。コングは彼女をつかみあげるとふたたび森の奥へ去っていった。

恐怖に気も狂わんばかりのダウンはただひとつ、いかにしてこの怪物から逃れるかで頭がいっぱいだ。

しかし、コングはこの小さな「花嫁」に意外にも優しくかった。逃走の途中、泥まみれになったダウンを滝そばに連れてゆき、シャワーを浴びさせてやったりした。少くともダウンはコングに危害を加えられはしないかという不安

はなくなった。

コングは追ってきた搜索隊を一蹴したが、辛うじて難を逃れたプレスコットは、いましも襲いかかった大蛇と格闘するコングのすきを見てダウンを救い出すことに成功した。一方、待機するウィルソンは、コングを生け捕って、宣伝に使おうというアイディアに夢中だった。彼には野心があった。

ダウンとプレスコットを追ってきたコングはウィルソンの仕掛けた罠にはまり、ついに捕えられた。マンモス・タンカーでニューヨークへ運ばれる途中、船倉に収容されたコングに、さすがに女らしく、ダウンはいつしか同情の気持を抱いていた。

自信満々のウィルソンは一夜、ニューヨークのシェイ・スタジアムで大デモンストレーション・ショーを開催した。何万人もの大群衆の目の前に巨大な給油塔が運びこまれた。覆いごとで除かれると、鋼鉄の鎖に縛られたコングが現われた。「キングコング！」…場内におこるどよめき、メインスタンドに立つダウンにフラッシュが集中したとき、彼女の危機を案じたコングに怒りの本能がよみがえった。鎖を断ち、自由になったコング！

プレスコットに伴われて逃げまどうダウンを追って、コングはスタジアムから市内へとニューヨークの目抜き通りを進んでゆく。一大パニックに陥った市民たち。地下鉄をわしづかみにし、マンハッタンで遂にダウンを手にしたコングは、世界貿易センタービルを登り始めた。

スカル島の切り立った岩山を思い出したのかもしれない。地上411メートルの高さに達したコングにダウンは叫んだ。「わたしを離しちゃだめよ、コング！殺されるわ！」だがコングはダウンを安全な場所に移すのだった。その直後、空軍のジェット戦闘機が攻撃を開始した。近代兵器に素手で立ちむかうコングの最後の闘いがいま始まったのだ！





1933年に製作公開された映画『キング・コング』は、映画史上最高の最大ゲテ物として、その名も高い。これはつまり、巨大な猿というゲテ物を素材としながらも、映画スタッフたちの大車輪の努力の結集が、それを秀れた作品としてしまった好例といえるだろう。そして、だからこそ“キング・コング”の名は、この映画に出発し、普通名詞として大いに使用されるようになってしまったのだ。

では、一体この大ゲテ物は、スタッフの熱意によって、どんな秀れた作品になったのか。これが実は、これを見る年令、世代によって微妙に違うところに、最大の面白さがあると僕は思う。

まず、子供たちである。謎の南海の孤島にすむ巨猿コングを、彼らは自分、もしくは自分の友達として、もう熱狂的に楽しんでしまうのである。なぜならば、旧作『キング・コング』の最大最長の見世場は、謎の島にコングと共にすんでいる、様々な太古の恐竜たちの描写。人形アニメーターであり特殊効果マンであるウィリス・H・オブライエンが、のりにのって動かした恐竜たちとは、実は心理学的に言えば“母親の庇護”を象徴し、だからこれにかぎらず子供たちは怪獣好きであるはずなのだ。そんな意味で、子供たちは恐竜と遊ぶ（あるいは戦う）程度に巨大化された自分たちの分身、つまりキング・コングを大いに愛し、ニューヨークはエンパイア・ステイト・ビル上での彼の死を、わが事のごとく嘆き悲しむわけなのである。

次に、もう少し年令が上の、子供＝大人たちである。これもまた、南海の孤島にすむ巨猿コングを、自分もしくは自分の同類として熱狂する事には変りはない。しかし、彼らのコングを通した興味関心は、子供たちのように恐竜にあるわけでは決してなく、全然別のもの。いうまでもなくそれは、コング

がとらえて島の奥地へと連れ去った、白人女性アン・ダーロウなのである。そんなコングの、彼女への性的興味もまた、この映画の大いなる話題の一つであり、たとえば彼が人形のような彼女をいとおしみ、他の人間が近付くと嫉妬さえるような部分を、子供＝大人たちはわが事のように共感したのである。これがしかし、いたって幼稚な性的関心である事は当然だろう。別ないい方をするならば、彼らはまさしく小さな人形のようにしか女性をとらえていないわけであり、そんな本格的な“性”をぬきにした異性愛こそが望ましかつたのである。そういった自分を同化させるのに、巨大なオスたるコングは、まことに都合のいいキャラクター。かくて彼らは、ニューヨークの上空での、コングとアンの“プラトニック・ラブ”と、その結果のコングの殉死を、わが事のごとく共鳴するわけなのである。

キングコング

映画評論家

石上三登志

旧作「キング・コング」より



そして、大人たちである。これはもう、決して南海の孤島にすむコングなどに同化熱狂したりはしない。という事は恐龍などもどうでもよく、しかしヒロインたるアンになると話は別なのである。つまり、彼らはコングよりもむしろ、アンたちと島に行き、アンを愛するがゆえに、アンの危機に敢然と行動を開始した、船員ジャック・ドリスコルこそが、自分もしくは自分の同類という事になる。そして、そんな彼らには、恐龍たちを含むコング島の危機こそは、自らがヒーローとなり、アンの異性愛を獲得するための、むしろ試練。かくて彼らは、ニューヨークでのコングの最期と、その結果のアンの無事を知り、わが事のごとく喜ぶわけなのである。

つまり、である。こういった大人的な見方からすれば、象徴としてのコングは、また別な意味を持つてくるのであろう。即ちキング・コングとは、巨



大な大人キャラクターであるにもかかわらず、恐龍つまり“母親の庇護”を無意識に求め続ける、成熟しない否定的な男の象徴である。もっとはっきりいってしまえば、むしろマザー・コンプレックスにとりつかれた男の、大いなる象徴こそが、われらがキング・コングの心理学的正体だったのだ。

だから、彼は子供＝大人たちのまたとない同化物でもあったのだろう。性的な接触なしに、しかし異性は求めたいという彼らの心理は、この大キャラクターによって大いに昇華され、かくてその死が巨大であればあるほど、むしろ性的な快感にすらつながるというわけなのだ。

こういった分析は、それこそ秀れた作品ならば、どんな場合でも成立するだろう。そして秀れた作品としての旧『キング・コング』は、そんな意味で子供から大人までを含み、それぞれがそれぞれの形で快感をおぼえるからこそ、偉大だったのである。ゲテ物も、ここまで来ると、もはやゲテ物などといっではいられないという事なのである。

ところで、新作『キング・コング』の場合はどうなのか。南海の謎の孤島は、同じように存在する。そこへ連れて行かれたあげく、コングに捕えられる女性アン・ダーロウは、名前を変えてドワン（ジェシカ・ラング）である。彼女をコングから助け出す船員ヒーロー、ドリスコルは、名前も職業も変って、古生物学者プレスコット（ジェフ・ブリッジス）である。

だが、なぜかコングの島には、あの恐龍たちがいないのである。恐龍、即ち子供たちのプリミティブな性的関心物が、今度はまるで出て来ないのである。これが、新作『キング・コング』と旧作『キング・コング』の、決定的な違いだと、僕は思う。

そう考えると、新作『キング・コン

グ』は、前述したような意味での子供、子供＝大人、大人といった、プロセス的な受けとめ方は、まるで成立しなくなるだろう。そして、次のような、ごく常識的な意味づけが、こちらの最大の興味関心となるだろう。

つまり、『キング・コング』とは、あの“美女と野獣”物語の、巨大なる典型という事なのだ。野獣とは、象徴化された男そのものである。そして美女とは、象徴化された女そのものである。つまり、男の攻撃欲は、女のやさしさの前にのみ、エロティックに昇華されるという寓意なのである。これあるからこそ、コングはドワンを求め続け、ついには世界貿易センター・ビルの頂上において死んでゆくのであり、その巨大な死あればこそ、人々はそこに男と女の本来の結びつき、即ち恋愛のカタルシスを発見し、共感するわけなのだ。

当然の事なのだが、旧作『キング・コング』にもまた、こんな意味は含まれていた。そして、その上にさらに、前述したような分析もまた可能だったのだ。だからこそ、40年以上も前のこの白黒スタンダード映画は、時代を超越して語り継がれてきたわけなのである。別ないい方をするならば、それは“伝説”だったわけなのだ。

1976年に製作公開される映画『キング・コング』は、映画史上最高最大のゲテ物の、本格的な再映画化作品として、その名も高い。これはつまり、ゲテ物を素材としたのではなく、“ゲテ物”映画を素材とした、新しいアプローチともいえるだろう。では、果してこれが、新たな“伝説”となり得るかどうか。これはもう、そこから何かを得るべき、新しい観客の心理に期待するだけである。“伝説”は、常に、はじめからそうあるのではないという事なのだ。





『キングコング』の宣伝キャンペーンに來日したジョン・ギラーミン監督に会った。「ロードショー」誌にインタビュー記事を書くためである。

くわしいことは、雑誌をみて頂きたいが、彼のこの言葉は、ぜひあなたにおスソわけしたくなった。

ギラーミンは、『キングコング』のラスト・シーンを、「文明が猛獣を殺した」と要約したのだ。そして、その点だけが、旧作の『キングコング』とのちがいだといった。

旧『キングコング』は、1933年につくられたが、「美女が^{ビューティ}猛獣^{ビースト}を殺した」というラストのセリフが有名である。ギラーミンは、それをもじって、「文明が猛獣を殺した」といいかえた。

旧『キングコング』が美女に恋したキングコングの悲劇の物語なら、新作は、文明を加害者として名指す映画なのだ。

彼によると、411メートルの世界貿易センター・ビルからベトコン用のガトリリング砲で撃ち落されるキングコングは、ただの猛獣ではない。なぜなら、恋人のジェンカ・ラングを愛し、彼女にも愛されながら、猛獣の形をしているばかりに殺されてしまう。

キングコングをより人間的に描くことが、ギラーミンの狙いとなると、33年から77年までに流れた44年の歳月の意味は小さくない。

それにしても、たった一つの点でしか、二本の『キングコング』がちがっていないとは……そのことを確かめるために、旧『キングコング』のつくられた時代について考えてみよう。

33年といえば、アメリカが不況のどん底から這い上がろうと懸命な年だった。

不況は、29年からはじまったが、アメリカ中の人間をまきこんだ点で、南北戦争より深刻な問題だったという学者もいる。

現に、33年は、2,000ドル（約60万円）



キングコングと大統領

映画評論家

の年収しかない家庭が、アメリカの全家庭中60/パーセントを占めた。2,000ドルは、当時でも、やっと生活必需品が買える程度の金額である。フランクリン・D・ルーズベルトは、ニュー・ディール（新規まき直し政策）を旗印に、32年の大統領選挙に勝ったが、これといった名案はなかった。

特撮スタッフの一人オービル・ゴールドナーが書いた『キングコング』の製作によると、不況の影響は箇所にあらわれた。

たとえば、エンパイア・ステート・ビルのキングコングを襲う海軍機（カ

ーチスO2C2練習機を攻撃機に見立てている）のパイロットは、10ドルの“袖の下”をもらって大ハッスル。だれもいないビルのてっぺんめがけて決死の急降下をくり返した。

特撮シーンと組み合わせるためだから、彼らは戦争ごっこのように、そこにキングコングがいた場合を想定し、放れ業を演じたのだ。

「不況なればこそその迫力」と、ゴールドナーは書いているが、きびしい軍律も10ドルの魅力には勝てなかった？

旧『キングコング』が製作にあたって、特に不況を意識した形跡はない。



増淵 健

サイレント映画の『失われた世界』(25)で、俳優とミニチュアの怪獣をはじめて同じ画面に登場させたウィリス・H・オブライエンの起用が目立つ程度……トーキー技術を生かせる素材として、キングコングが選ばれたと考えてもいい。プロデューサーのメリアン・C・クーパーは、キングコングを、「出来るだけグロテスクにして欲しい」と、オブライエンに注文した。それに対して、オブライエンは、「出来るだけ人間らしくする」ことを主張し、結局、その通りになった。

キングコングが、『JAWS』(75)の人

食いザメとちがい、愛すべきヒーローとして半世紀近く健在なのは、オブライエンのおかげである。

とはいえ、映画は、しばしばつくり手の意思と関係なく、時代をうつす鏡としてひとり歩きをはじめた。そこで、南海の狐島から、キングコングをニューヨークへ拉致して見世物にする主人公を、33年当時のアメリカ人の心情にダブらせることも可能だ。

旧作の一獲千金を狙う主人公は、なんとかして不況から脱け出したい願望の象徴だろう。エンパイア・ステート・ビルから撃ち落されるキングコングは、もちろん、その犠牲者である。

ゴールドナードは書いている。「海軍機のたくましい編隊長とハンサムな偵察員を演じたのは、クーパーとアーネスト・B・シュードサツク監督であった。この興味深い配役は、前者の次のような言葉から決まった。『私たちは愛すべき怪獣を殺す自分の俗物根

イデアがあるのなら、私も出演したのに……残念!」

ところで、『キングコング』は77年のアメリカにとってなんなのか?ここにも、旧作と同じ、大統領選挙の影がさしているのを見逃してはならない。

現職大統領のジェラルド・フォードを破り、ジミー・カーターが、「第三世紀の初代大統領」として登場した今日だから、あらためて世に出る意味をもつといえよう。アメリカは、リチャード・ニクソンのおかげで墮ちるとここまで墮ちた威信と誇りをとり戻すため力をもったヒーローを欲するのだ。ついこの間まで中央政界に全く無名のカーターを選ぶのは、危険この上ない賭けだが、今は、それをしなければならぬ。

33年ほどの不況でもない代り、慢性化した欲求不満のはけ口を求めるアメリカ人にとって、キングコングはカリスマ(教祖)的な魅力にはちがいない。



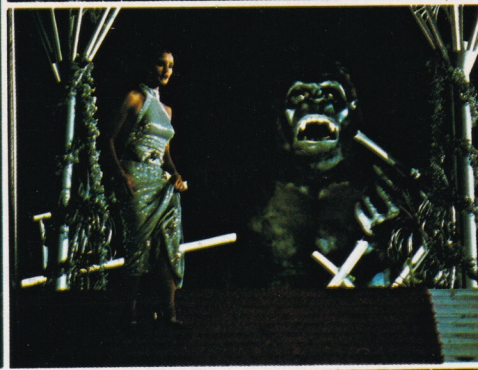
性を罰しなければならない。』

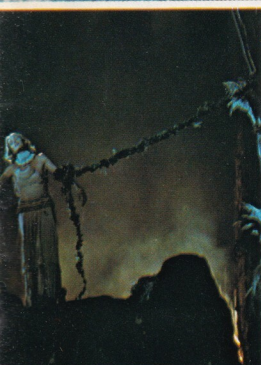
キングコングの一撃で、火を吐いて墜落するのは、クーパーとシュードサツクの塔乗機だった。

私が、そのことをギラミンにいうと、彼は初耳だと答え、「そんないいア

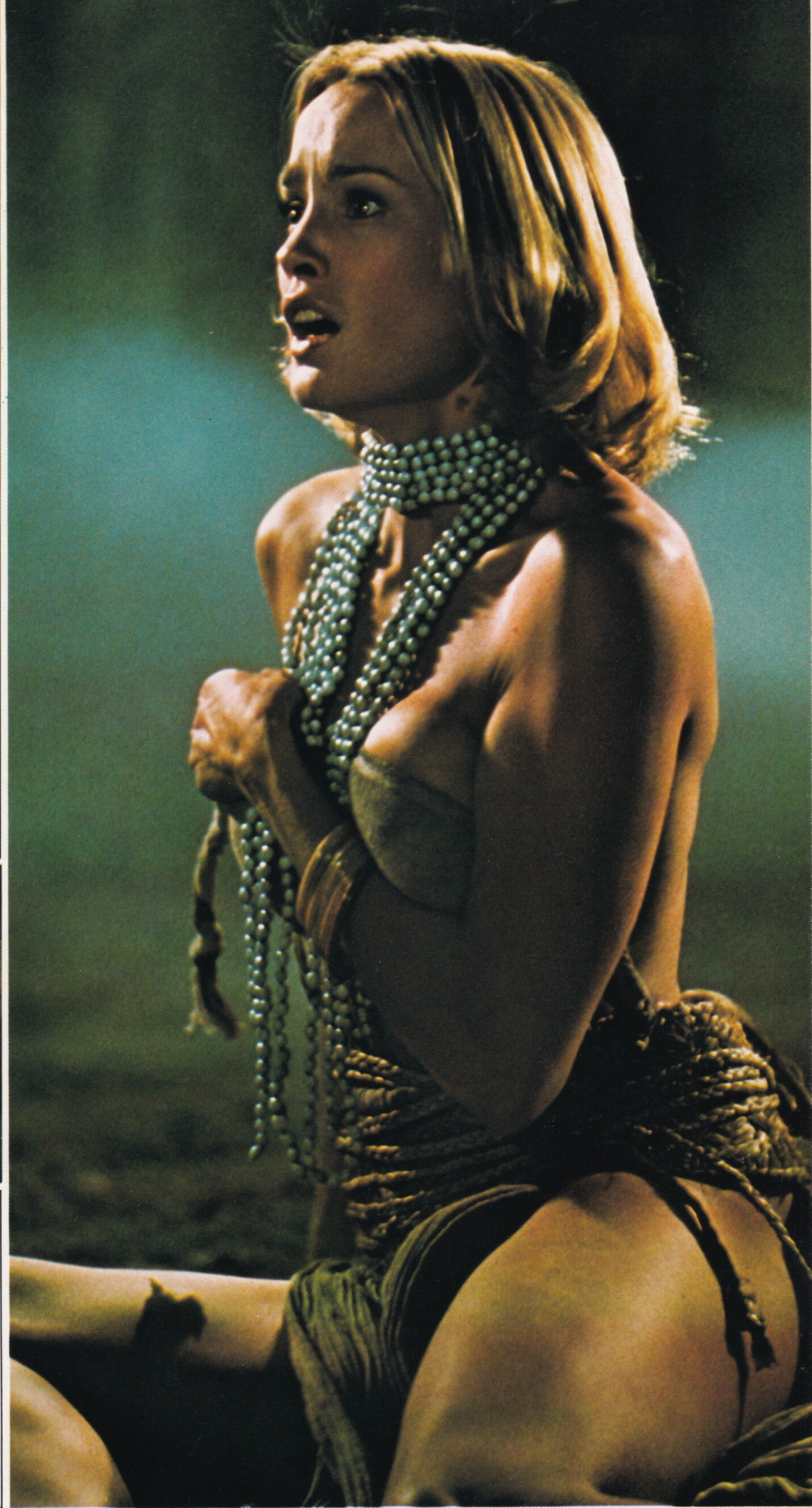
カーターが、内政の最大のテーマとして失業問題を挙げているのも、こうしてみると、偶然ではなさそうだ。

新大統領に、『キングコング』の感想をきいてみたい。





King Kong



ジェシカ・ラングと ジョン・ギラーミン 監督にきく

ブラウスに、白いスカートの軽装で記者会見に現われた(76・11・16)ジェシカ・ラングは、いかにもファッション・モデル出身らしい、すずやかな美人であった。インタビューのときはブラウス姿で、そのあとのパーティでは、白いジャケットを着て……というのがニューヨークのトップ・モデル出身、そしていま世界でいちばん注目されている新人女優の、日本初お目見得の衣裳だった。

南の島で、身の丈20メートルもあるキングコングにさらわれ、最初のうちは恐怖におののいているが、やがてコングの優しさを、受けとめるようになる女性ドワン——これがジェシカ・ラングの役どころである。彼女と一緒に来日したジョン・ギラーミン監督は「こ

をテストしたが、なかなか思うような人は見つからなかったという。

こんなとき、ニューヨークからステキな情報が入った。「トップ・モデルで、しかもパリで、パントマイムを学んだことがある女優志願者がいる」と。もちろん彼女、ジェシカ・ラングのことである。すぐさまハリウッドに呼ばれたのは言うまでもない。

「映画出演はおろか、私はまだ撮影所という所にも行ったことがなかったんです。ですから行くだけで、もう興奮してしまっ。ずいぶん広い所だなあーというのが、最初の感想でした」

ジョン・ギラーミンに言わせると、彼女はレンズを通すと、ますます生き生きとするタイプの女優だという。昔からよく言われる映画女優の必須条件、

来日したJ・ラングとギラーミン監督



映画評論家

小藤田千栄子

の役は、どうしても新人の、若い女性でなければならなかった。新版キングコングの恋人は、すでにイメージのある人ではいけないしという信念のもとに、まず女優探しを始めた。そして、ハリウッドとロンドンで、50人の新人

ふだん見るよりも、カメラの眼を通して見たときのほうが輝く、いわゆるフォトジェニックな女優というわけだ。

ファッション・モデルだから、もちろん細くて背が高い。といっても「リップスティック」のマーゴ・ヘミング

ウェイほどではなく165センチくらいか。年齢は、20代の前半だと思うが、誕生日は4月20日とだけ言い、この質問には答えなかった。「言わないことにしているの」と、あいまいに微笑むのみ。どうも近頃、わが日本の宝塚の女優さんみたいに、生年隠しが流行して、俳優事典を作るときなど、はなはだ困る。アカの他人の生年というのは、ちょいと気になるものなのに。

同席のジョン・ギラーミン監督は若く見える。1925年生まれだから、もう50歳をすぎているのに、ジーンズの上着など着こなして、とてもカッコイイ。撮影現場で怒鳴っているより、書斎にでもいたほうがきまるのではないかと思える、そんなインテリふう。

この監督のもとヘテストを受けに行ったジェシカ・ラングは、演技テストの途中で、もしかしたら、この役は、自分に決まるのではないかという、そんな気がしたという。

「もちろん最初は、すっかりあがってしまっ。でも途中でチラと、私の眼の中に監督の表情が入ってきたの。一瞬、彼の目は、キラキラツとしたのです。それで、もしかしたらと思いました」

その「もしかしたら」は、まさに適中してこの大作にキャスティングされたわけだが、それにしても記者会見でここまで細かく、プロセスを説明する女優も少ない。テストのときに、途中で監督の表情をとらえるなんて、たいした新人さんだ。そんな彼女の説明を、隣りでジョン・ギラーミン監督は、うんうんと、上機嫌で聞いている。

「決定して、それから3週間後には撮影に入っていました。スタッフの方たちと仲良くなるにしたがって、キャスティングされたうれしさが、こみあげてきました」

「キングコングって、その姿かたちは恐いですよね、だって身長20メー

ルですもの。でも、映画を見ていただければ誰れにもわかることですが、彼（キングコング）は優しい人（なのかしら？）なのね。だって、私以外の女性には目もくれないんですもの。私だけをお愛してくれたいんですから。女にとっては理想の男性よ。だから彼女ドワンが、最初は恐がっているけれど、コングの気持ちがわかってくるに従って、だんだん愛を感じていくのはとってもよくわかるわ。コングは、私のために死んでいったの」

「私は、キングコングの恋人。でもコングは死んでしまったし、いま私には恋人はいません。スパニエル犬と二人（？）で住んでいます」

「タワーリング・インフェルノ」で、大作指揮の腕を認められたジョン・ギ

ンスでした。登場してドワンをつかみ、2人が初めて顔をあわすところでしたね。本当のスペクタクルの始まりですから」

「映画におけるスペクタクル、これは映画史をふり返ってみても、スタートの頃からありました。スペクタクルをどう表現するか、これは映画における大きな課題でしょう。今日、私たちが劇場で見る映画の99パーセントは、テレビで見られる種類のもですよ。劇場用映画は、お金をかけなくてははいけません。かつて映画は10万ドル（3,000万円）でも作れました。でも今は違います。本当に面白い映画を作ろうと思ったら、大金を投じなければいけません。これが現代の、劇場用映画というものでしょう」



ラーミン監督は、前作に比べ「キングコング」は、10倍もむずかしかったという。でも楽しみも大きかった、とも。

「いちばん苦労したのは、やはりキングコングが初めて登場するシークエ

ところでキングコングは、コンピューターで動いているが、くわしい構造は秘密にされている。

「ええ、もちろん今でも秘密です。これは企業秘密というものですよ」とのことであつた。



キングコングを解剖する！

知能

オリバー君ぐらい人間社会になじめないが、自然を愛する心は人間以上

視力

1 キロさきの人間も見わけられる。

聴力

100メートルさきの木の葉の音が聴ける。

胸囲12メートル

腕の長さ9メートル

手の長さ3メートル

脚の長さ8メートル

身長20メートル

体重55トン

破壊力

ジェット戦闘機などひとひねり。パンチ力はモハメッド・アリの10万倍以上

特長

闘いに勝った時、胸をたたいて叫ぶ

性質

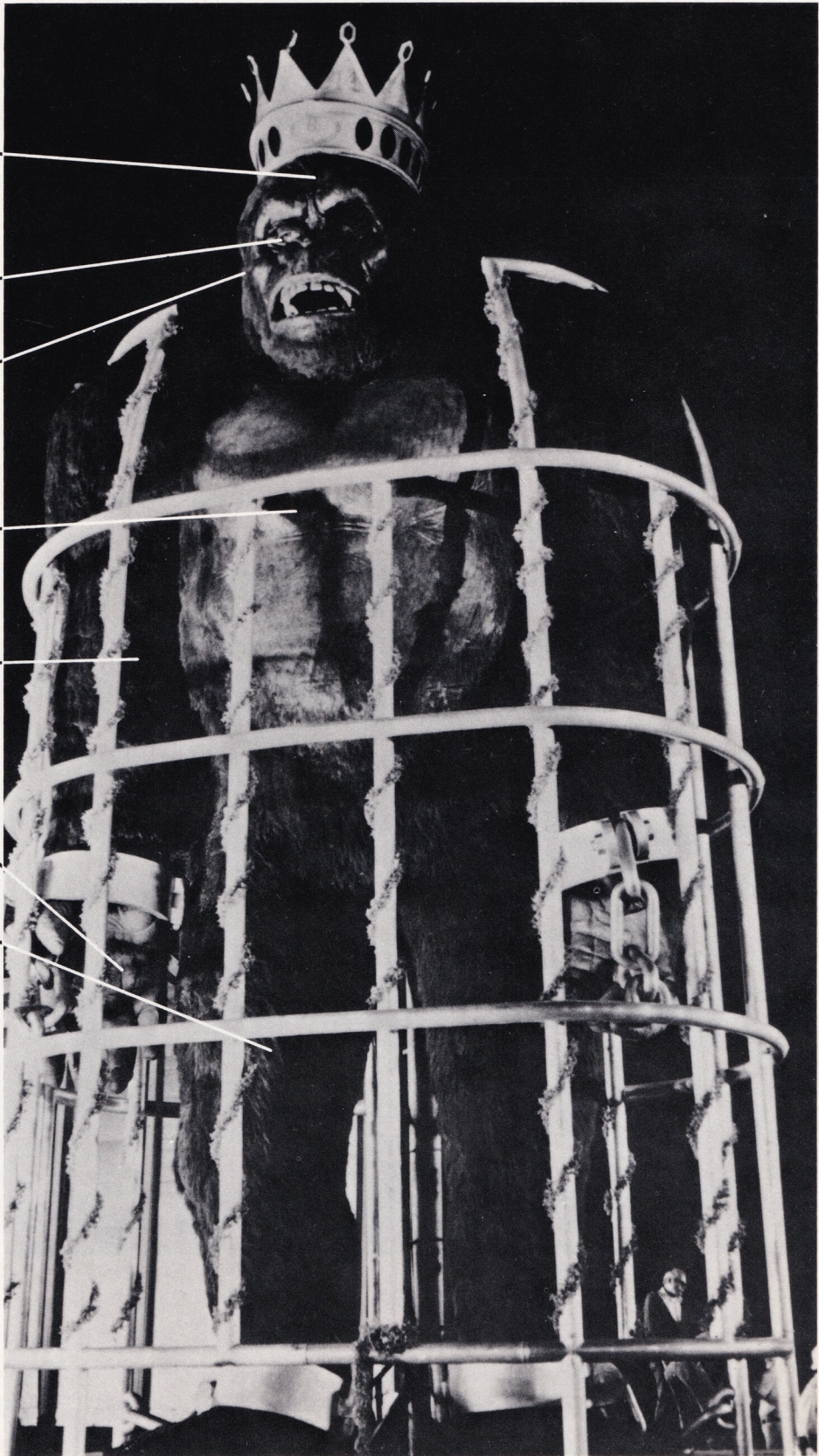
もともとは気はやさしくて力もち

好きなもの

バナナやマンゴーなどのくだもの

棲家

ジャングルの奥深く。岩山の穴の中。



★ディーノ・デ・ラウレンティスの発想

イタリアからアメリカに本拠を移した大プロデューサー、ディーノ・デ・ラウレンティスには、今年14歳になるフランチェスカという娘がいる。いまから2年前のこと、彼女は、父親の部屋の壁に貼ってあった「キングコング」のポスターを見て「私、この映画みたいわ」と言ったのである。この一言が、超大作・新版「キングコング」製作のスタートだった。フランチェスカが見たポスターとは、もちろん1933年製作の旧作「キングコング」である。

このとき、ディーノ・デ・ラウレンティスの頭にはピンとくるものがあつた。「そうだ、この映画を見たがる観客

した。リサーチを重ねると「見たい」と言う人が続出してきた。メリアン・グーパーとアーネスト・B・シェドザックの2人が共同監督で発表した旧作から、すでに40余年の歳月が経っている。その後、リバイバル公開はされたが（日本でも昭和27年に再公開されている）、「キングコング」という映画は、過去に一度しか作られていない。にもかかわらず、美女を手にしたキングコングの姿は、人々の胸の中に永遠のヒーローとして生きている。ラウレンティスは決断を下した。

「新・動く標的」や「コンドル」の売れっ子ロレンソ・センプル・ジュニアに脚本を依頼し、監督は「タワー・リ

リ、でも、これも解決してラウレンティスは、勇躍、撮影に着手したのである。

★ハッピー・キングコング・イヤー

「ポスト「ジョーズ」は、これ1本」と宣言し、宣伝に乗り出したラウレンティスの気迫には、目を奪うものがあった。まず、1975年の大晦日、ニューヨーク銀座とも言えるタイムズ・スクエアに電光ニュースを流したのである。『パラマウント映画と、プロデューサーのディーノ・デ・ラウレンティスは、アメリカ中がハッピー・キングコング・イヤーを迎えることを祈ります』と。ニューヨークつ子たちは驚いた。『ハッピー・ニュー・イヤー』ならわかるけれど『ハッピー・キングコング・イヤー』とは！

続けて76年1月1日のニューヨーク・タイムズにも、全面広告を打った。文面は同じく『ハッピー・キングコング・イヤー』であった。この広告は、とりわけ新しいものの好きの映画人にシヨックを与え、ラウレンティスの狙いどおり、新生「キングコング」は、その登場を待たれるようになったのである。

★キングコングのサイズと動き

製作費は、当初1600万ドル（48億円）であった。その後、追加予算で2200万ドル（66億円）となり、最終的には2500万ドル（75億）と、ほう大な数字となった。こんなに予算が増加したのは、より、リアリティを求めて撮り直しを重ねたためでもある。このうち、キングコング一体に、約9億円のお金がかかっている。

コングの身長は20メートル、胸囲12メートル、腕の長さ9メートル、脚の長さ8メートル、美女をつかむ手のひら直径3メートル、足のサイズは2メートル、体重は65トンである。この巨

プロダクション・ノート



は多いに違いない。それなら、映画技術がぐっと発達したいま、メカニックを駆使して、新しい「キングコング」を作ってみてはどうだろうか？

ラウレンティスは、すぐ行動を開始



ング・インフェルノ」のジョン・ギラーミンを起用。製作会社はパラマウント。だが、この間、原作の著作権を持っていたユニヴァーサル社との間に、コング争奪戦が起こって裁判沙汰にな

体が、のっしのっしと歩くのだから、まさにスクリーン狭し。そして、このキングは、すべてコンピューターで操作される。コンピューターのボタンひとつで、顔の表情まで変わるというからスゴイではないか。

だから、キングコングの体の中は機械だらけ。体の各部を動かすために、水圧ホースや電線がいっぱい。6人の技術要員が、カメラのうしろで動かしている。体は発泡スチロールに馬の毛を植えて作られている。胸のあたりは、かなり、ふさふさ。余計なことだが、このキングコングに性器はついていない。そして撮影の都合により、頭、両腕、上半身、下半身に分解できるようになっており、頭は5つ、腕は二対のスペアが作られた。キングコング作りには、アメリカとイタリアから、200人のスタッフが参加。

★キングコングの撮影

セット撮影は、ハリウッドのMGMスタジオを使って行なわれたが、ロケはハワイ諸島の西北にあるカウアイ島で進められた。この島に、石油会社のモーレッツ社員が油田を探しに来るという設定である。ガスが吹き出し、“石油がある！”と大喜びしたのも束の間、密航してきた古生物学者プレスコットの発言“これは巨大な動物の呼吸ではないのか”に、物語は一転する。

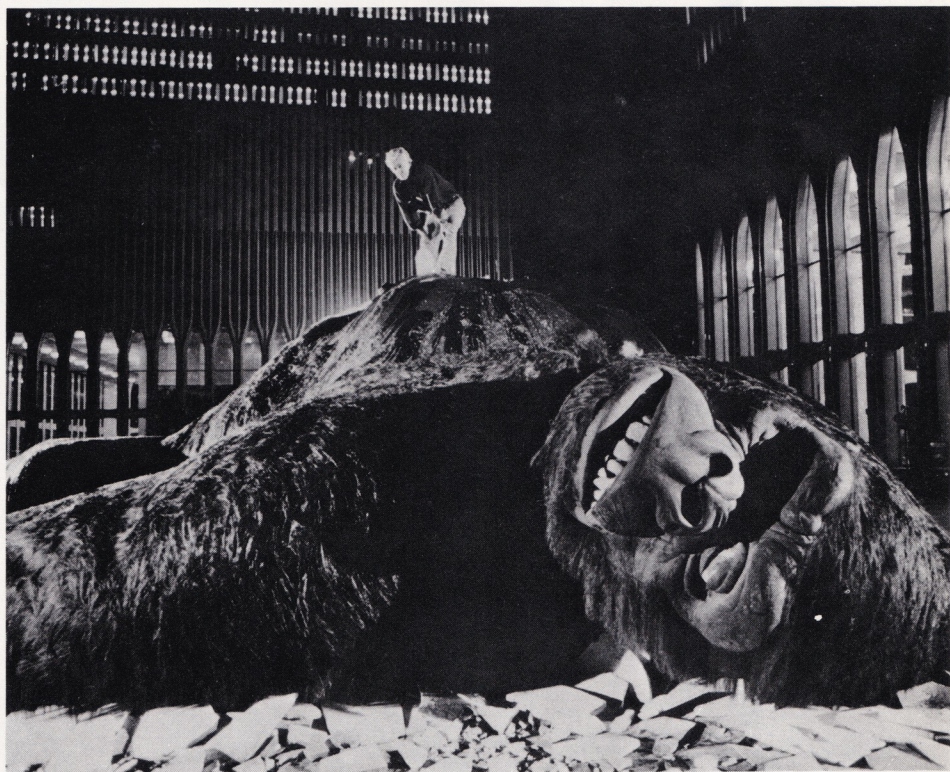
キングコングの森と住民の世界をへだてる巨大な壁は、約150メートルにもわたって築かれ、その前で、300人のエキストラが儀式的のシーン演技をした。この撮影現場に、たまたま訪れたのがスウェーデン出身の巨匠イングマル・ベルイマン。さしもの芸術派も、仕掛けの大きさに驚きの声を発した。

大きな穴に落ち、クロクホルムをかがされて、正体をなくしたキングコングを、超大型タンカーで運ぶが、これ

は全長412メートルのノルウェー船が使われた。ちなみに、旧作には、このシークエンスはなく、ガス弾をあびて倒れたキングコングを写し、次は、ニューヨークの場であった。ついでながら、旧作との大きな違いを記すと、まず、主人公が石油会社の人間ではなく、映画監督だったということ。彼がスマトラ近くの島に撮影に行くという設定であった。ドワンの役は、仕事がなく町をさまよっていた新人女優、プレスコットの役は船員であった。役名も今回、変更してある。旧作でのキングコングは、ブロードウェイで見世物にされ、ラストはエンパイア・ステート・ビルの屋上で、空軍の飛行機に、

・ビルの前で行なわれた撮影には、5000人のエキストラが集められたが、なんとギャラなしの見物人が3万人も押しかけた。物見高い人は、どこにでもいるものだ。予想外の大動員に、ニンマリしたのはスタッフたち。ジョン・ギラーミン監督は、4台のカメラをまわして空前のモブ・シーンを撮影した。

ほかにもニューヨークでは、高架地下鉄、イースト・リバー・パーク、59番街橋、ハノーバー広場などでロケが行なわれた。キングコングが、マンハッタンを南下して、ドワンとの出会いに至るシークエンスだが、見物人参加のこの撮影は、まさしくパニック・ニューヨークであった。



あわれ撃ち殺されたのであった。

今回は貿易センター・ビルによじのぼり、時代を反映してジェット機にやられる。

★熱狂ニューヨークっ子

キングコングの最後、貿易センター

ニューヨークに負けてはならじと発憤したのがロサンゼルスっ子。キングコングが姿を現わすシーンに、ロス市民は、こぞって参加。コンピューターでの、あざやかな動きに、ときならぬどよめきが、わき起こったのであった。



STAFF

Directed by.....John Guillermin

Produced by.....Dino De Laurentiis

Screenplay by.....Lorenzo Semple, Jr.

Executive Producers

..... { Federico De Laurentiis
Christian Ferry

Director of Photography.....Richard Kline

Music Composed and Conducted by

..... John Barry

Production Designers..... { Mario Chiari
Dale Hennesy

Special Effects.....Glen Robinson



CAST

Dwan.....Jessica Lange

Prescott.....Jeff Bridges

Wilson.....Charles Grodin

Captain Ross.....John Randolph

Bagley.....Rene Auberjonois

発行所 東京都千代田区有楽町1-2-1 東宝株式会社事業部
昭和51年12月17日印刷
昭和51年12月18日発行 発行権者 東京都中央区銀座2-6-4プレイガイドビル内
東宝東和株式会社
成旺印刷株式会社
印刷所 東京都港区芝2-1-28

定価 250円



A JOHN GUILLERMIN FILM
KING KONG

STARRING
JEFF BRIDGES
CHARLES GRODIN

INTRODUCING
JESSICA LANGE

PRODUCED BY
DINO DE LAURENTIIS

DIRECTED BY
JOHN GUILLERMIN

